

# 『落窪物語』論

——少将道頼の人物造型を通して——

大 原 智 美

はじめに

継子物語として知られる『落窪物語』は、当時の人々の生き方や性格を反映させ、人間そのものの姿を描ききった意義深い作品である。というのも『落窪物語』は大まかに分けて、虐待から報復へ、そして報恩へと展開していく構成をとり、そこに描かれる登場人物の発言・動作・心情が非常に読者の関心を惹きつける魅力を持つと思うからである。

本論においては、男主人公の少将道頼に焦点を当て、一章・発言から考える道頼の性格、二章・報復、報恩に託された道頼の真意、という二つの章を立て、彼がこの物語の中で果たす役割というものを考えてみたい。

## 一章 発言から考える道頼の性格

『落窪物語』の男主人公の少将道頼は出自も容貌も優れており、当時の貴族社会における理想的な男性像の印象を与えるが、本物語中、彼は逆境（虐待）に置かれた落窪姫君を救い出し、姫君に代わって加害者（中納言家）に復讐し、更には主体となって報恩を施す。

また、彼は落窪姫君一人に愛情を持ち続け、当時では異例の夫一妻制を貫いた。本論では、その少将道頼の人物像について考える。

道頼という人物を考察するにあたり、先に彼が主導権を握って行った報復と報恩について、また、道頼が直接関係するわけではないが、報復・報恩を決意するきっかけとなった継母から落窪姫君への虐待についても、その内容を以下に示す。その順番は物語の展開どおり、虐待・報復・報恩の順に従う。

まず、虐待に関して述べる。これには北の方（継母）が主人公の姫君を「落窪」の呼称で呼び、縫い物の強要をし、粗末な衣服を着させ、調度品を奪取するという類の虐待が挙げられる。つまり、日常生活における様々な場面で北の方（継母）は落窪の姫君にイジメの目を向けるのである。そして決定的な虐待としては、何といつてもやはり落窪の姫君と典薬助との結婚の画策が挙げられる。

次に報復に関して述べる。これには、四の君と面白の駒との結婚、清水寺参詣での嫌がらせ、藏人少将と中の君との結婚、加茂祭当日の横暴な権力行使、三条邸奪還という五つが挙げられる。特徴としては、日常的に行われていた虐待とは対照的に、報復は、道頼によって予め綿密に計画され、それが各イベントを契機に行使されて

いたということであると考える。そしてこの点については次の報恩部でも同様である。

最後に報恩について述べる。これには、道頼と女君（落窪）が、中納言に対して八構、七十賀を催したことが挙げられる。更に範圍を広げて考えると、夫との關係を破綻させてしまっていた四の君に帥との結婚を成立させ、三の君には中宮御匣殿という社会的地位を与えたこと、中納言家の人々へ様々な贈り物をしたことも報恩として認められるであろう。

物語展開の各部の内容に触れたところで、話を道頼の人物像に戻す。私はこの道頼について、作者によって全てを計算し尽くされた人物、という視点で考えてみたいと思う。作者によって計算し尽くされたというのはどういうことなのであろうか、こうした論点で進めるために、彼の性格延いては役割とも言える二つの特徴、をまず提示したいと思う。

- ① 余裕をも感じさせる機知に富んだユーモア性
- ② 報復から報恩までの一糸乱れぬ決意の固さ

尚、少将道頼の呼び名は昇進に伴い、少将、中将、中納言衛門督、大納言、大将、左大臣、太政大臣と変化していくが、ここでは混乱を避けるために「道頼」で統一することにする。

- ① 余裕をも感じさせる機知に富んだユーモア性
- まず、道頼のユーモア性であるが、彼はこの物語中で何度も冗談

めいた発言をする。そこには、一夫一妻制を貫いた理想の貴公子というイメージとはかなりズレを感じる部分もある。では、どのような発言があるのか例を挙げてみたいと思う。

- I 「らうたう、なほおほえば、ここに迎へてむ」と、「さらずは、『あなかま』とてもやみなむかし」〈巻一 二三頁〉
- II 「笠も取りあへで、袖を被きて帰るばかり」と笑ひ給ふ。〈巻一 三七頁〉

この二例は、道頼が落窪姫君とまだ出合っていない場面における彼の発言である。道頼は

落窪姫君の身の上を帯刀から聞いてはいるものの、詳しくは知らず、気の毒なという同情と興味本位だけで彼女に近づこうとしている。しかし、興味本位だからといって道頼はどんな女性が相手でも構わないということは決してない。その女性が可愛いことが彼にとっては大前提なのである。つまり、彼にとっては、その女性が可愛くなければ必要ないということである。このことについて吉田真紀氏は次のように述べている。

道頼は落窪の君を「見てこそは定むべかなれ」と考えており、落窪の君の境遇を「あはれ」に思い、「わかうどをり腹」の姫君というところで興味を持っていたが、だからといって中納言に知られ、「不遇な扱いを受けている」落窪の君の婿として通う気にはなっていないことが分かる。道頼は色好みの好奇心で落窪の君に近付こうとしていた。

また、柳川明子氏は次のように述べている。

まず最初に道頼が色好みに設定されていたのは、単純にそうでなければ物語が始まらないからだと考えられる。当時の結婚には妻は実家から援助を受ける目的があったため、貢献もなく冷遇されている女君に通う物好きは、色好みの男性ぐらいだという現実があったであろう。<sup>2)</sup>

両氏とも、この道頼の性格について、「色好み」という言葉を用いて説明している。まさにこの発言から窺える性格としては適切な言葉であるように感じる。因みに、「いみじき色好みと聞き奉りしものを」（巻一 一二頁）とあるように、当初はあこきも道頼のことを「色好み」だと評している。しかし私は、この道頼の発言から面食い・色好みという特徴はもちろんだが、更に彼のユーモア性を感じる。帯刀の発言への返事が妙に機知に富んでいるとは言えないだろうか。特にⅡなどはその顕著な一例であろう。「もし姫君の姿が可愛くなく期待外れだったらどうするか」と言う帯刀に対して、道頼は「姫君に会わない」と直接的に断るのではなく、「笠を手にとるのもどかしく、袖を被って帰るだけだ」といかにも遠回しに、そして余裕をたつぷりと見せて帯刀に対応するのである。

この二つの用例は、道頼のユーモア性を示す発言の中でも、落窪姫君に関連したものである。では次に、この物語の中で最も道頼のユーモア性が顕著に示されていると思われる例を検討する。

Ⅲ 「男は、一人にてや侍る。うち語らひて侍れかし」と笑ひ給へば、

北の方、「いで、あな憎。人あまた持たるは、嘆き負ふなり。身も苦しげなり。なものし給ひそ。その据ゑ給へらむに思しつかば、さてやみ給ひね。今、訪ひ聞こえむ。」とて（巻四 一六二頁）

（中略）

「これも、よも忘れ侍らじ。またもゆかしう侍り」と申し給へば、母北の方「いかでか。けしからず。さらに思ひ聞こゆまじき御心なめり」と笑ひ給ふ。（巻四 一六三頁）

これは巻二において、道頼の実母の北の方が、息子の愛すべき人つまり落窪姫君の存在を知る場面である。既に道頼は継母（中納言家）への復讐を決意しているのであるが（中納言一家は復讐されることなど予期していない）、ちょうどこの頃、道頼には中納言家の四の君との縁談の話が進んでいた。つまり、この台詞の中の（二人の妻）や（他の女性）というのは、落窪姫君ともう一人、四の君の存在を示していることになる。しかし勿論、道頼の心に四の君の存在ではなく、彼が愛しているのは落窪姫君だけである。では最後まで落窪姫君ただ一人を愛し、一夫一妻制を貫き通したにも拘らず、なぜ道頼はこのような好色めいた発言をしたのであろうか。

一つには、その後の第一の復讐（四の君と面白の駒との身代わり婚）をスムーズに行うため、というのが考えられる。つまり、翌月に行使される身代わり婚の計画を誰にも知られずに進めるために、実母に対しても敢えて適当に対応して、四の君との縁談を破談させたくないという思いを持っているということである。まずは第一の復讐を成功させたいと強く思っている道頼にとって、これくらいい

演技は何ともないものであろう。

しかし、道頼がこのような発言をした真意は本当にそれだけであろうか。この発言にこそ、道頼の余裕に満ちたユーモア性が潜んでいるのではないかと思われてならない。つまり、道頼の心は落窪姫君だけを愛し、その他の女性には関心がないのであるが、それでも取えてこのような発言をすることで、彼は自分の権力の大きさと男としての魅力を、自己確認しているとは考えられないだろうか。「自分は落窪姫君だけを愛すが、他にも妻を持つと思うべきだろうか。それだけの力や魅力を兼ね備えているのだから。」というような具合である。ここは、権門の長男として両親に愛され、有能で帝の信頼も厚く、世間からも信望されている道頼の尊大で自信家の一面が読み取れる顕著な一例であろう。

## ② 報復から報恩までの一糸乱れぬ決意の固さ

本文から読み取れる道頼という人物は、決意が固く、自分の思い通りに事を運ぼうとする、自分本位な人間であると言える。本文中の巻二から巻三にかけて、道頼は北の方（継母）を中心とした中納言家に、数多くの報復をするのだが、それらは決してどれも突発的なものではなく、道頼によってあらかじめ綿密に計画されていた。その証拠に、作者は道頼の報復に対する意志や決意を本文中に複数回描写している。以下にその例を挙げてみる。

・少将、ただ今も這ひ入りて、北の方を打ち殺さばやと思ふ。（巻一 一一九頁）

・「いかで、これを盗み、後に、北の方に、心惑はするばかりに、

ねたき目見せむ」と思ひ言ふほど、執念く、心深くなむおはしける。（巻二 一二五頁）

・少将、「かの北の方に、いかでねたき目見せむと思へばなり」とのたまへば（巻二 一五九頁）

・かの少将は、北の方の、いとねたく憎くて、いかで、わびしと思はせむと思ひ染みにければ（巻二 一六一頁）

・疾く、いかで、これが報いせむと思ひしほどに、（巻二 一七〇頁）

・わが妻を調ぜしぞかしと思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。（巻二 一八五頁）

・「……思ひ置きしこと違へじ」とのたまふ。（巻二 一九五頁）

・「いま少し調ぜむと思ふ心あり。」（巻二 二一九頁）

・「後にねたがらせむ」（巻三 一五頁）

・北の方、ねたしと思ひ知れとなりけり。（巻三 三二頁）

これらの例をI群とする。分量から言うと、圧倒的に巻二の描写が多い。これは巻一で散々継母から虐待されてきた落窪姫君を救い出し、そこから道頼があらゆる手段を使って報復劇を始めるのが巻二であることから当然のことと考えることが出来る。逆に巻三では報復が終盤に差し掛かると同時に報恩が始まり、巻四では完全に報恩にのみ焦点が当てられていることから、記述が少ないのも必然である。

では次に、作者が道頼の報恩に対する意志や決意を本文中に描写している場面上げてみる。つまり、「いつか世話をしよう」という道頼の明確な意思を記述している場面である。そしてこちらの例

を今度はⅡ群とする。

・遂げて後に、引き替へて顧みむと思ふこと深くてなりけり。(巻二 一七〇頁)

・「今、打ち返し仕うまつらむに、御心は行きなむ・・・」(巻二 一九五頁)

・「わがせむと思ひし本意遂げむ・・・」(巻三 七五頁)

分量はⅠ群に比べるとⅡ群は少ない。この理由としては、実際に報恩が盛んに行われてくる巻三・巻四に於いて、道頼は報恩を改めて決意し直してから実行に移すようなものではなく、ごく自然なものとして捉えていた為だということが考えられる。あるいは、巻四後半における報恩の主体は落窪姫君であり、むしろ道頼はそのサポーターとしての役割が強いという理由も推測できる。

ここで注目すべきなのが、Ⅰ群にも入ると同時にⅡ群にも入る例が二つあるということである。(巻二 一七〇頁、一九五頁) つまりこの二例に於いては、道頼が同じ記事の台詞や感情の描写の中で、報復と同時に報恩に対する決意も語っているのである。これは異常なことではなからうか。道頼は「北の方を打ち殺さばや」、「北の方に、心惑はするばかりに、ねたき目見せむ」と並々ならぬ報復の決意を複数回口にするのである。そのような状態の人間が同時にその先のことで冷静に考えるのは、非常に難しいことのように思われる。しかしそれかといって、どちらかに妥協しているということもなく、道頼は報復にも報恩にも大真面目であり、実際にそれらを見事に遂行するのである。この意志の強さ、そして並々ならぬ実行力

こそが、「報復から報恩までの一糸乱れぬ決意の固さ」を実感させる所以である。

提示した以上の二点「①余裕とも感じさせる機知に富んだユーモア性」「②報復から報恩までの一糸乱れぬ決意の固さ」より、やはり道頼は作者によってその役柄・性格を全て計算し尽くされた物語のキーパーソンとして認めることが出来ると思われる。

## 二章 報復・報恩に託された道頼の真意

『落窪物語』を考察するにあたり、道頼の行動真意を分析することと抜きに論ずることは出来ない。なぜならば、この物語の流れの主導権を握っているのが道頼だからである。もちろん、他の登場人物の利害関係が絡み合うことでこの物語が成立することは当然のことであるが、虐待から報復そして報恩へという展開の指揮をとるのはやはり道頼に他ならない。更にいえば、道頼の存在の発覚によって落窪姫君への虐待が深刻化したという点を考えれば、道頼は多少、虐待の原因を作ったと言えるかも知れない。つまり、道頼は虐待・報復・報恩という三部の構成全てに他の誰よりも影響しているのである。

なぜ道頼は報復・報恩を決意しなければならなかったのか。これは物語展開を追う上で究極の問のように思われるが、ここには従来の先行研究においても解釈の揺れがあるようである。ここではそれらの解釈の違いを検証し、先述した道頼の性格を考慮しながらその真意を探っていきたい。

従来の解釈を分類すると、報復・報恩における道頼の行動原理は大まかに次のように整理できる。

## I 落窪姫君への愛情を示すため

### II 権力行使活動を正当化するため

先に、「I 落窪姫君への愛情を示すため」の立場から考えていく。道頼が落窪姫君に対する愛情を示すために報復と報恩を執行したというのはどういうことであろうか。

これは、この上なく愛している女性が虐待によってひどい目に遭わされたのだから、その仕返しとして継母（中納言家）を痛い目に逢わせるのは当然という考え方の上に成り立つ。その徹底した報復へ向ける彼のエネルギーは、前述した「一条乱れぬ決意の固さ」という道頼の性格にも充分通ずる。しかしこのように考えた場合、報復の理由はこれで説明がつくとしても、報恩についてはどうであろうか。最愛の人への愛情を報復という手段によって示すならば、物語はそこで完結しても良いのではないだろうか。報復を済ませることで落窪姫君の痛みは帳消しになり、愛情も示すことが出来たと考えられる。それにも関わらず、報恩を、しかも報復を決意するのと同時に決意した道頼の意図は何であろうか。日暮佐緒里氏は次のように説明している。

姫君を愛するばかりに、北の方に何とかして仕返しをしてやりたい、その為には中納言一家を巻き添えにしても仕方がない。道頼はそう考えるのである。この考えは道頼のエゴイズムにもつながり、それを帳消しにする為の孝養譚は道頼の優しさの表現にもなっている。<sup>3)</sup>

つまり、日暮氏によると、報恩は道頼のマイナスイメージを帳消しにして、彼の優しさを表現するための手段ということになる。確かに、それも一理あるかもしれない。しかしこの日暮氏の説明には疑問点、あるいは矛盾点が隠されているのではないかと思われる。

それは「報恩が報復の帳消し」と考えるならば、報恩はそれ自体にあまり重要な意味を持たず、あくまでも報復を補完するための補足的な役割にすぎないのではないかとことである。しかし虐待・報復・報恩の三者は分量からしてもほぼ均等であり、それぞれの展開自体に意義があるので、報恩を報復の補足とするこの考え方が妥当だとは言えない。

また、吉田真紀氏は次のように説明している。

道頼の報復は、半分は落窪の君を苛めた継母を懲らしめるものであり、自分や落窪の君が感じた苦しみを味わわせるためだが、もう半分は自分のせいでここまで苛めがひどくなったことへの憤りからであるということができないだろうか。<sup>4)</sup>

吉田氏は、道頼は自分が落窪姫君の所へ通っていたことが発覚したために虐待が悪化し、典薬助との一件をも引き起こしてしまったという負い目を感じ、報復・報恩を決意したと考えておられる。確かに、道頼の出現によって継母の怒りが増幅し、虐待が悪化したということとは事実である。しかし、それが報復・報恩の原動力になったのかというよりは疑問が残る。というのは、負い目や罪悪感を感じてくれないならば、そもそも落窪姫君の前に現れたり、彼女を救出することなどしなれば良かったと、道頼が思っているのかどう

かといえ、決してそのようなことはないと思われるからである。道頼が救済しなければ落窪姫君はずっと虐待されたままであろうし、二人が結ばれることはなかった。道頼がそれを望むとは到底考えられないし、自分の行動に後悔しているという可能性も極めて低いであろう。また、虐待を深刻化させてしまったという負い目を落窪姫君に対して持っているならば、報復によってその償いをするというのは筋が外れているのではないだろうか。というのも、落窪姫君は当初から報復に対して否定的な見方を示しており、道頼に何度も忠告をしているからである。落窪姫君への償いを落窪姫君の意に反した行動によって道頼が示したとは考えにくい。

では次に、道頼の行動の原動力を落窪姫君への愛とは無関係に「Ⅱ 権力行使活動を正当化するため」とする立場について考える。この立場は、道頼が報復も報恩も落窪姫君のためではなく、結局は自分の為に行ったのではないかとする考え方であり、高田瑞穂氏や松本奈々絵氏に支持されている。高田氏は次のように述べている。

彼の復讐は時の人としての権力によつて成されていく。復讐とは、つまり権力行使の一樣相に他ならぬ。然らば何故復讐という形がとられたか。ここに私は、作者の、権力描写の合理化とも言ふべき態度を見ることが出来ると思ふのである。<sup>5)</sup>

また、松本奈々絵氏はこの権力行使活動についてより強い主張を展開している。

作者は道頼の女君への愛情を示すことを目的としていて、そ

の結果、道頼の報復・報恩という行動に至ったのではなく、道頼の報復・報恩活動それ自体が目的であり、そこに女君への愛があったということはただの理由にしかすぎないと考えられる。<sup>6)</sup>

松本氏の意見を整理すれば落窪姫君への愛は権力行使のための理由であり、一夫一妻制という設定も、道頼が他の女性までも愛してしまえば、彼の落窪姫君への愛の深さを理由とした数々の報復を行えなかったという作者の創作上の意図に過ぎない、ということになる。筆者にとつては道頼の報復・報恩活動を正当化するためには、彼がこの上もなく落窪姫君を愛しているという大前提が必要だったのだと考えられる。さらに松本氏は報復・報恩に留まらず、そもその前提である「継子虐め」という設定も道頼の権力行使を正当化するための手段に過ぎないと述べている。

作者にとつて『落窪物語』を継子虐め譚として創作した理由は、道頼の報復・報恩という権力行使活動を正当化する舞台として継子虐めという設定が必要であつたにすぎず、言い換えれば、道頼の行動を正当化する他の話型があれば、『落窪物語』は継子虐め譚ではなくても良かったのである。<sup>7)</sup>

勿論、「継子虐め」部分が権力行使活動を正当化するためだけに用意されていたのかどうかは断定できない。この物語を「勧善懲悪主義を正義とする物語」とするならば、他の何でもなく「継子虐め」があるからこそ物語が成立するという見方も出来よう。しかし、「報復」「報恩」における道頼の徹底ぶりを考えるならば、松本氏が考

えるように、やはり「継子虐め」部分はその虐待一つ一つに重点が置かれているというよりも、その後の「報復」部へと話を上手くつなげるための序章としての役割を強く担っていた可能性が高いのではないだろうか。

ここまで、道頼の行動原理つまり行動力の根幹なるものについて「『落窪姫君への愛情を示すため』『二権力行使活動を正当化するため』という二つの立場を示してきたが、果たしてその真相はどのようなものか。私は当初、前者の立場を支持していたが、道頼にこのような徹底した行動をとらせた作者の真意を考えるとやはり後者の方が適当なのではないかと考える。この権力行使説を支持するにあたっては、そもそも道頼の権力とは如何程なのか、そしてその権力は道頼が報復と報恩を実行する根拠となり得るほど強固なものだったのか、という点について考える必要がある。道頼の官位昇進については以下のような点である。当初は左少将であったが、巻二において三位中将、そして中納言兼衛門督となる。そして巻三において大納言兼大将へと出世し、巻四においては左大将さらに太政大臣へと昇りつめる。官職名を列挙しただけでも順調にエリートコースを歩んでいることが分かるが、大納言就任後には「この大納言は、まして、二十余にて、いと清けにて、ものものしくて」(巻三 六五頁)」、太政大臣就任後には「まだ四十になり給はで、位を定め給へることよ」(巻四 一四九頁)」と人々が彼の年齢の若さをもてはやしている点からは、それが相当順調なものだったということが更に印象づけられる。しかし、道頼の官位昇進の順調さを示しただけで、それが報復・報恩において彼が権力を行使する根拠になり得たとするのはやや早合点のように思われる。そこで注目したいのは道頼の

権力が実際に人々にどれほど認められていたのかという点である。物語中において人々が実際に、道頼の権力を素晴らしいものと評価していたのであれば、それは権力行使説を支える裏づけとなり得るのではないだろうか。そしてそのような描写が物語中には複数回現れるのである。

#### 「左少将」時代

・「ただ今なり出で給ひなむ」と人々褒む。(巻一 九六頁)

#### 「三位中将」時代

・司召しに中将になり給ひて、三位し給ひて、おぼえまさり給ふべし。(巻二 一八四頁)

・ただ今の第一の人にて。(巻二 一八八頁)

・ただ今の一もの、(巻二 一九二頁)

・ただ今、なりもて出でなむ(巻二 二〇二頁)

#### 「中納言兼衛門督」時代

・衛門督、おぼえのまさり、わが身の時になり給ふままだに(巻二 二二二頁)

・ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼ひに手触れてむや(巻二 二二五頁)

・ただ今の時の所なる(巻三 一六頁)

#### 「大納言兼大将」時代

・この御世にのみなり果てぬ。大納言の御おぼえ、いみじ。(巻三



六一頁)

・この大納言は、まして、二十余にて、いと清げにて、ものものしくて、(巻三 六五頁)

・いとはなやぎまさり給ふこと限りなし。(巻三 七四頁)

・また、男も人々しくならむことは、ただ、この御徳。(巻四 九九頁)

#### 「左大臣」時代

・なかなか、御子なむ、親の心ばへに見えける。(巻四 一〇六頁)

・御徳はいやまさりなり。(巻四 一一一頁)

・ただ今の時の人の御統とて、(巻四 一二六頁)

#### 「太政大臣」時代

・まだ四十になり給はで、位を定め給へることよ(巻四 一四九頁)

左少將時代の描写はさすがに少ないが、それ以降は各官位のスティージにおいて権力の偉大さと、その有能さを人々に褒め称えられているのである。さらに注目すべきはその描写の一部を列挙したが、左大臣時代(巻四 一〇六頁)における場面である。ここには十五行にわたって左大臣の権勢の素晴らしさが悉く描かれている。そしてその描写は単に道頼を褒め称えるものに留まらず、実父太政大臣と比較して、官位は下でも、父親を凌ぐ権勢を誇っている、という内容なのである。また、左大臣時代においては息子・娘を含めた、一族全体の繁栄具合も細かく描写されている。作者がこうした描写一つ一つを意図的に描いたと考える時、報復・報恩における権力行

使の可能性は高められるのではないだろうか。

そして、さらに権力行使を支えると思われる場面展開がもう一つ用意されている。それは巻四冒頭の場面であるが、ここで道頼は「わがを譲らむの御心つきて(巻四 八三頁)」と、自分の大納言というポストを重病の舅である老中納言に譲るのである。いくら死が目前の中納言に報恩をし尽くすといっても、かつて恨みを抱いていた落窪姫君の実父である。心優しい落窪姫君の望みのため、あるいは同情ゆえと考えたとしてもやや正当性に欠けるのではないだろうか。私はここに道頼の自負が存在するのではないかと考える。つまり、たとえ自分の大納言のポストを譲ったとしても、もう自分の権力や信用は揺らぐことはあり得ない、むしろ親孝行息子としてより評価が高まるのではないか、というような自信の顕れということである。そしてそのままその譲位の提案は、右大臣や帝にもすんなり受け入れられるのである。やはりこの場面は道頼の権勢の素晴らしさを示す重要性を持つと考えられよう。

#### おわりに

『落窪物語』における男主人公、少將道頼について、その発言を基に性格や人物像を探り、徹底した活躍ぶりを見せる報復・報恩部における彼の行動原理を考えてきた。道頼の権勢の偉大さが複数、そして悉く描写されていることを根拠に、私は彼の行動の原動力には、落窪姫君への愛情というよりは「権力行使活動を正当化するため」という目的が作者によって組み立てられているように考える。容姿が美しくて出自もよく、帝からの信頼も厚くて順調に出世の道を歩んだ道頼にはもはや誰の手にも止められない勢いがある。そし

てそのような描き方をする事で、作者は当時では最大限の権力を有する男君の可能性あるいは理想性を文章という形で残しておきたかったのではないだろうか。

尚、本論における本文の引用は、室城秀之訳注『新版 落窪物語 上 現代語訳付き』『新版 落窪物語 下 現代語訳付き』（角川学芸出版、二〇〇四年二月）に拠る。室城氏の訳注は、宮内庁書陵部蔵『おちくば』を底本としたものである。

## 引用文献

- 注(1) 吉田真紀『落窪物語』における道頼の役割『国語国文学誌 第二十二号』、広島女学院大学日本文学会、平成四年十二月
- (2) 柳川朋子『落窪物語』の研究―道頼の人物像を軸に―『学習院大学国語国文学会誌 第四十二号』、学習院大学国語国文学会、平成一十一年三月
- (3) 日暮佐緒里『落窪物語』研究―道頼の人物像を中心に―『東洋大学短期大学論文集日本文学編 第二十二号』、東洋短期大学、昭和六十年
- (4) 吉田真紀『落窪物語』における道頼の役割『国語国文学誌 第二十二号』、広島女学院大学日本文学会、平成四年十二月
- (5) 高田瑞穂『落窪物語の性格』『平安朝物語Ⅲ』、日本文学研究資料壮行会、昭和五四年一〇月
- (6) 松本余々絵『落窪物語における道頼の役割―報復・報恩活動を中心に―』『国文橘 第三十二号』、京都橘大学日本語日本文学会、平成十八年三月
- (7) (6)に同じ